学校だより

翔　　空

№４１　平成２４年　２月２１日（火）
郡山市立喜久田中学校長　大堀　昌弘

「翔空（しょうくう）」の由来　〈校舎のシンボル〉

壁画「空へ」を受け、風光明媚（ふうこうめいび）なこの学舎（まなびや）から、希望に燃え限りない空へ、力強く翔んでほしいという願いを込めて、翔空の碑ができた。

［著名な古典の一節］

引き続き著名な古典の一節を紹介します。

今回は、作者不詳の「平家物語」の有名な冒頭の部分です。

［原　文］
祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色。盛者必衰のことわりをあらわす。おごれる人も久しからず。只春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。

［現代語訳］
祇園精舎の中にある無常堂の鐘の音は、あらゆる物は常にうつろいゆくと説く無常を響かせてくる。お釈迦様が亡くなる前に白く変化したといわれている沙羅双樹の花の色は、盛んな者でさえ、いずれは必ず衰えるのだという道理をあらわしている。おごり高ぶっている人であっても、その状態がいつまでも永久に続くわけではない。それは、ちょうど、春の夜のはかない夢のようなものである。勢いある者でもついには滅んでしまう。それは、風に吹き散らされる塵（ちり）さながらのありさまである。

※　どうですか。現在ＮＨＫの大河ドラマ「清盛」で扱っているのがまさしく、この無常観をただよわせる平安末期の状況（時代）なのです。

あるたとえ話から学ぶ

～本当の思いやりとはどんなもの？～

みなさんは、次のようなたとえ話を聞いたことありますか。

あるお寺で若い修行僧が老師に尋ねた。
「あの世には地獄と極楽があるそうですが、地獄とはどんなところなのですか？」
すると、老師は次のようにお答えになった。
「確かに、あの世には地獄もあれば、極楽もある。しかし、両者には思っているほどの違いがあるわけではなく、外見は全く同じだ。ただ一つ違っているのは、そこにいる人たちの心なのだ。」
老師が語るには、地獄と極楽には同じように大きな釜があって、そこには同じようにおいしそうなうどんがぐつぐつと煮えている。しかし、そのうどんを食べるのが一苦労。長さが１ｍほどもある長い箸を使うしかないというのです。
地獄の人はみな、われ先にうどんを食べようと争い、釜に箸を突っ込んでうどんをつかもうとします。でも、あまりに箸が長いために、誰一人として目の前のうどんを口にすることができません。
それに対して、極楽では、同じ条件なのに全く違う光景が繰り広げられます。だれもが長い箸でうどんをつかむと、釜の向こうにいる人の口へと運び、「あなたからお先にどうぞ。」と食べさせているのです。食べた人も、「ありがとう。次はあなたの番です。お待たせしました。」とお返しにうどんを取ってあげているのです。

この話は、私たちに何を訴えようとしているのでしょうか。同じような世界（環境）に住んでいても、あたたかい思いやりの心をもてるかどうかで、そこが極楽にもなり、地獄にもなる、ということではないでしょうか。日本語というのは、とても便利な言語で、この状態を表す言葉として、「利他の心」という表現があります。世間一般の会社について、経営の神様とも言われている稲盛和夫氏が、次のようなことを書いています。（「生き方」〔稲盛和夫著〕より）

「どんな会社でも、よい経営を続けていくためには、心の底流に『世のため、人のため』というごくごく単純な思いやりの気持ちがなくてはいけない。そのことを再三再四繰り返し強調することが大切なのである。」

この話は、当然学校教育にも通じるものであると信じてやみません。